

抑圧された [劣化] ウラン兵器問題 - “注意” に賭けられているもの -

嘉指信雄 (かざしのぶお)
神戸大学文学部教授 / 哲学
「NO DU ヒロシマ・プロジェクト」代表

放射能兵器=劣化ウラン弾を使った

「イラクの自由作戦」とは一体何なのか？

アメリカとイギリスは、イラクによる大量破壊兵器保有を理由にイラク戦争を強行したが、今や、その大義は崩壊した。しかし、今回の戦争でも使用された劣化ウラン兵器がまさに大量破壊兵器であることを見据える時、イラク戦争の「正当性」は、さらに一層深く、根底から覆される。

イラク戦争は「イラクの自由作戦」の名の下に行われたが、劣化ウラン兵器を使用しての戦争が、人々を解放する「正義の戦争」などと、どうして言えようか。

イラク南部など、湾岸戦争中、アメリカとイギリスによって劣化ウラン弾による爆撃が行われた地域では、癌や白血病、先天障害の憂慮すべき増加が報告されている。バスのジャワード・アル-アリ医師は、今年5月ベルリンで開かれた「IPPNW (核戦争防止国際医師会議) ヨーロッパ大会」で、次のように訴えていた—

「アブ-グレイブ収容所での虐待が問題になっていますが、イラク国民は、湾岸戦争以降ずっと、劣化ウラン弾によって虐待し続けられているのです」と。

社会学者ロバート・ベラーによれば、民主主義の成否は、何に注意を払うかにかかっている。劣化ウラン兵器による被害の実態に焦点があてられれば、イラク戦争はイラクの人々を「解放」する戦争などといったレトリックは到底通用せず、また、自衛隊による「人道復興支援」がいかにも問題の根幹を覆い隠す役割を果たしてしまっているかが一層明らかとなろう。その意味で、劣化ウラン兵器問題は、日本にとっても、今後の「憲法改正」論議の行方も左右しかねない、決定的な鍵となる問題 (キイ・イシュー) である。

[劣化] ウラン兵器は、大量破壊兵器である

いわゆる [劣化] ウラン兵器は、核燃料サイクルや核兵器の製造過程で排出される放射性 [廃棄] 物質の軍事利用である。劣化ウランは、鉛よりも重く、鉄よりもはるかに固いという希少な性質をもつ。劣化ウラン弾の貫通力は、同じサイズの鋼鉄の弾丸と比較すると、2.4倍。したがって、その破壊力は「革命的」であり、従来の戦車は無意味になったと言われる。さらに、劣化ウランは、衝突後、燃焼し、マイクロレベルの微粒子となって拡散してしまう。劣化ウランは、化学的毒性もきわめて高く、放射能に関しても、「劣化」という不適切な形容がつけられているが、天然ウランの少なくとも60パーセントの放射性を有すると言われ、その半減期は四五億年。(地球上に生命が誕生したのが、およそ44億年前と言われる。) したがって、劣化ウラン兵器は、その及ぼす被害の範囲が空間的にも時間的にも限定できないという意味で、まぎれもない非人道的大量破壊兵器である。

劣化ウラン弾は1991年の湾岸戦争で初めて大規模に—米軍側の公式発表でも300トン以上—投入され、続いて、ボスニア、ユーゴスラビアにおいてはNATO軍によって、さらにアフガニスタンでアメリカによって、そして再びイラク戦争ではアメリカとイギリスによって湾岸戦争を上回る量が使用されたと推定されている。

劣化ウラン弾は、周知のように、第一次湾岸戦争後ほどなくして、「湾岸戦争症候群」の原因として論争を引き起こした。1996年以降、国連の人権小委員会において、劣化ウラン弾は、「兵士、市民のいずれに対しても大量無差別的被害をもたらす」、現存の国際人道法や人権法と「両立しがたい」非人道的兵器とみなす決議が三度にわたり採択されている。また、コソボ紛争後、ヨーロッパ兵士の間に「バルカン症候群」が発生し、2001年1月には、ヨーロッパ議会が、劣化ウラン弾禁止を求める決議を採択している。

[さらに今年9月、ベトナムのハノイで開かれた第5回「アセム (=アジア・ヨーロッパ会合)・ピープル

ズ・フォーラム」で採択された声明においても、核兵器のみならず、劣化ウラン兵器や枯葉剤も大量破壊兵器としてみなし、その使用禁止、および被害者に対する支援を要請している。

なお、今年1月、ベトナム戦争終結後30年にして初めて、ベトナムの被害者が補償を求めて、アメリカの化学会社三十数社をニューヨークの連邦裁判所に集団提訴している。その支援のオンライン署名も始まっている。原爆のみならず、枯葉剤、ウラン兵器による測り知れない被害を思う時、アメリカによる戦争は未だに一つとして終わっていないと言わざるをえない。]

アメリカとイギリスは、劣化ウランの危険性を知っている

アメリカやイギリスの政府は、公式的には、「劣化ウラン弾は人体に影響がない」との主張を繰り返してきているが、実際は、その危険性をはっきりと認識している。

例えば、米国の「非暴力行動のためのグランド・ゼロ・センター」のグレン・ミルナー氏は、情報公開法により入手した文書から、「1984年の時点で、米海軍はDU兵器の危険性やこの兵器の取扱い及び除染には特別な注意が必要であることを認知していた」ことを明らかにしている。アメリカ兵士は、湾岸戦争後まで、劣化ウランの危険性について全く知らされていなかったたのであるから、この事実が意味するところは深甚である。(参照：“CADU Newsletter, 2003 Winter”)

同様の情報は、1995年に「陸軍環境政策研究所(AEPI)」が作成した報告書「劣化ウラン使用による健康・環境への影響」にも収録されている。(参照：『「劣化ウラン弾」ってなに?』、「ウラン廃絶キャンペーン・東京」作成、39頁)

他方、イギリス軍は、イラク駐留中のイギリス軍兵士に対して、「DUは、低度ながら放射性的の重金属であり、健康障害を引き起こす可能性」があることを告げる「DU(劣化ウラン)情報カード」なるものを発行していることが、今年2月報道された。(参照：「資料—2」)

2003年3月の開戦当初から発行されていた、この「DU情報カード」が意味するところは、明白かつ決定的である。イギリス軍は、劣化ウラン弾の危険性を十二分に認識しているにもかかわらず、イギリス軍兵士以外には知らせようとしなかったのだ。後に続いたニュースによれば、この情報の流出にイギリスの政府や軍の関係者は憤り、一方、「湾岸戦争症候群」に苦しむ退役軍人や劣化ウラン弾が使われてきたスコットランドの演習場周辺の住民は、政府に騙されてきたと怒りを表明している。(2004年2月29日付『サンデー・ヘラルド』、「国防省は、劣化ウランについて“嘘”をついた一軍は、イラク駐留兵士には健康への危険性を警告していながら、スコットランドの射爆場は安全だと主張している、国際的に懸念が高まりつつあるのにもかかわらず。』)

「科学」をめぐるポリティックス

以上のように、アメリカとイギリスの政府や軍部は、劣化ウランの危険性をはっきりと認識しているにもかかわらず、公式的には、劣化ウラン弾は安全だと言い立ててきている。こうした主張の「科学的」根拠とされてきたのは、WHO(国際保健機構)などによる調査結果だが、科学的信憑性に欠ける、きわめて不徹底で偏った調査報告に基づくことが、明白になりつつある。

さらに、最近、WHOの姿勢の「中立性」そのものに関して、重大な疑念が投げかけられた。2月22日付『サンデー・ヘラルド』(スコットランド)は、下記の記事を掲載した。(訳：吉田正弘/「アメリカの戦争拡大と日本の有事法制に反対する署名事務局」)

「イラクでの劣化ウランによるガン発症の怖れに関する科学的研究を、WHOは“差し止めていた”-放射線専門家たちは未公開報告の中において、湾岸戦争中に連合国によって使われた劣化ウラン兵器は長期にわたり健康障害を引き起こす危険ありと警告-

環境問題編集者 ロブ・エドワード

米英の劣化ウラン兵器によってイラクの一般市民の健康が長期的に危険にさらされるだろうと警告する専門家の報告書が秘密にされていた。

優れた三人の放射線科学者によって行われたその研究は、放射能と化学毒性を持つ劣化ウランを含むチリを吸いこむと、子供も大人もガンにかかる可能性がある」と警告した。しかしその報告書は、主筆のケイス・ベイバーストック博士を上席放射線アドバイザーとして雇用しているWHOによって、公表を妨害された。WHOは否定しているが、博士は意図的に差し止められたと断言する。」
従来の理論では説明できない劣化ウラン「体内被ばく」

「劣化ウラン弾問題」をめぐる論争の難しさの一因は、体内に吸収された劣化ウランによって引き起こされる「体内被ばく」のメカニズムが従来の被曝についての理論枠組みでは取り扱えないことにある。昨年 10 月、ハンブルクで開催された「世界ウラン会議」で出された「科学者コミュニケ」でも次のように強調されている。(この会議には、イラクを含む 20 カ国から 100 名以上の専門家、活動家、被害者などが参加。日本からも約 20 名が参加した。)

「リスク評価担当の行政機関や軍部が用いている国際放射線防護委員会 (ICRP) モデルでは、劣化ウランによる被曝線量はあまりにも低いので目に見える健康影響は現れないだろうと予測しているが、このモデルは内部被曝の評価には適切ではない。体内に取り込まれた放射性粒子は、局所組織において高線量の被曝をもたらすからである。それにもかかわらず、ICRP モデルは外部被曝と平均線量に置き換えて、概算しているのである。」(訳：振津かつみ) [より詳しくは、肥田舜太郎・鎌仲ひとみ著『内部被曝の脅威-原爆から劣化ウラン弾まで』(ちくま新書、2005 年 6 月)]

さらに、劣化ウランの場合、放射線と化学的毒性の相乗的影響、いわゆる、「カクテル効果」という、未知の部分が多い、複雑な問題が加わる。従来の科学的枠組みに押し込もうとすれば、劣化ウランの危険性を捉え損なってしまうことになるのだ。それは、確立された「科学」の名において、被害の実態を「抑圧」し続けてしまう危険を意味している。劣化ウラン弾問題は、新たな「注意」の向け方が求められている問題であり、科学においても、「民主主義の成否」が賭けられているといえよう。(参照：ワシントンの「核政策研究所 (NPRI)」が 2003 年 7 月に発表した報告書「劣化ウラン-危険性評価の科学的根拠」。全文は、NPRI ホームページに掲載。特に、米軍の「放射線生物学研究所」(AFRPI)による動物実験から引き出された、「劣化ウランは胎盤を通過してしまう」という結論に注目。『劣化ウラン弾禁止を求めるヒロシマ・アピール』12-14 頁参照。)

それにも関わらず、日本の原子力文化振興財団は、今年 6 月、「劣化ウラン弾による環境影響」と題したメディア向けパンフレットを発行し、「劣化ウラン弾は安全である」と主張した。この「原文振パンフレット」の問題は、すでに、10 月 19 日付朝日新聞、同 20 日付毎日新聞などによって取り上げられているが、より広い批判的論議の対象とされるべき、憂慮すべき問題である。(パンフレット全文は、「原子力文化振興財団」ホームページに掲載されていたが、最近取り外された。)

英国の湾岸戦争帰還兵ショーン・ラスリングは、イラク戦争のはるか前、「(英国) 国防省は、劣化ウランは無害だといった情報を国民に流してミスリードしている。それは結局、世界を誤った方向に導くことにほかならない」と、問題の核心をついている。(田城明著『知られざるヒバクシャ-劣化ウラン弾の実態』142 頁) この言葉は、残念ながら、そっくりそのまま、現在の日本国政府にも当てはまる。

国際的キャンペーンの展開

劣化ウラン兵器の全面的禁止と被害者支援を求める声は、ここ数年強くなってきている。これらの声をひとつに合わせ、国際的キャンペーンを展開するため、2003 年 10 月、「ウラン兵器禁止を求める国際連合」(ICBUW=The International Coalition to Ban Uranium Weapons) がベルギーで発足し、ウラン兵器の全面的禁止、汚染地域の除染、および被害者への補償を目指す「ミッション声明」が採択された。事務局はアムステルダムに置かれ、今までに 20 カ国から 70 を越える団体が賛同を表明している。

[IPPNW=核戦争防止国際医師会議ドイツ・スイスの支部、イタリアのピースリンクなどに加え、コソボ、ウクライナ、ルーマニア、インド、パキスタンなどからも様々な団体が賛同を寄せており、日本からも NO DU ヒロシマ・プロジェクト、ヒバク反対キャンペーンの他、核兵器廃絶をめざすヒロシマの会、長崎の証言の会、京都反核医師の会、原水禁国民会議、劣化ウラン廃絶キャンペーン、広島県教職員組合、大阪および愛知の保険医協会など約 20 団体が呼びかけ・賛同団体として加わっている。詳しくは、「NO DU ヒロシマ・プロジェクト」ホームページを参照]

ICBUW では、オンラインも含む署名キャンペーンを昨年夏に開始。現在、日本を中心に 18 万筆以上の署名が集まっており、その一部が、今年 5 月、国際機関への働きかけの第一歩として、国連の事務総長と軍縮局長宛てに提出された。また ICBUW は、11 月 6 日を「ウラン兵器禁止を求める国際行動デー」として設定し、参加を呼びかけた。これは、国連総会によりこの日が「戦争と武力紛争における環境破壊を防止する国際デー」とされていることを踏まえたものであり、世界各地で

様々な取り組みがなされた。

5月のNPT再検討会議では、劣化ウラン問題関連のNGOワークショップが二つ開かれた。「劣化ウラン・ワークショップ」(ICBUW主催)と「ヒバク(体外および体内)再考-ヒロシマ・ナガサキからイラクまで」(「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会」・「NO DU ヒロシマ・プロジェクト」共催)である。

R・バーテル博士、H・カルディコット博士、湾岸戦争帰還兵などが報告したこれらのワークショップは、どちらも熱気にあふれたワークショップとなった。*News in Review* (NPT会期中、毎日発行されたNGOニューズレター)が5号と6号で両ワークショップについての報告記事を、「もう一つの放射性兵器」及び「体内ヒバク-メガ・サイズの被害を引き起こすナノ・サイズの粒子」というタイトルで掲載しているが、劣化ウランが引き起こす“体内ヒバク”の深刻さに対する驚愕と憂慮にあふれた内容となっている。[なお、バーテル博士の最新作の日本語訳『戦争はいかに地球を破壊するか-最新兵器と生命の惑星』(緑風出版、3000円プラス送料)が今夏、発行になった。お奨めの一冊である。]

一方、司法・行政レベルでの取り組みも各国で具体化しつつある。

2004年4月-ニューヨークの「デイリー・ニュース」紙は、イラク戦争後にサマワに駐留し、体調不良で帰国した米兵9人中4人の尿から劣化ウランが検出されたことをスクープ。現在、これらの帰還兵は国防省に対し賠償金を請求している。

同年4月-欧州委員会は、スコットランドのダンドレナン射爆場からソルウェー湾に撃ち込まれた劣化ウラン弾による汚染を調査することに合意した。

同年6月-イタリアの兵士ステファノ・メローネは、コソボ紛争後、劣化ウランに汚染された残存物に接触したが、帰国後、稀なガンにかかり、2001年に死亡。ローマの裁判所は、遺族に対し賠償金50万ユーロ(約6500万円)を支払うよう国防省に命じた。

2005年5月-ワシントン州選出マクダーモット議員は、劣化ウラン兵器が人体や環境に及ぼす影響に関する科学的調査を求める法案を下院に提出した。

同年6月-ルイジアナ州議会は、全米で初めて、イラクに派遣される兵士に対し、劣化ウラン検査を受ける権利を認める法案を可決。7月にはコネチカット州で同種の法案が可決され、他の州でも続く動きがある。

* * *

劣化ウラン・ヒバクシャの声を ヒロシマから世界へ ICBUW 来年度大会・日本開催に向けて

ICBUWの第二回年次大会が、6月23-24日、ブリュッセルのヨーロッパ議会内にて開催され、今後の活動方針とともに、来年度大会は日本で開くことが決定された。

来年の国際大会では、イラク、コソボなどを含む世界各地から被害者や専門家の方々も広島に迎え、劣化ウラン問題への緊急な対応を改めて国際社会に求める場にできたらと思う。

[追記：ウラン兵器禁止キャンペーンの国際大会を日本で開催することには極めて大きな意義がありますが、その準備・開催には多くの方々のご協力をお願いしなければなりません。資金面を始め、様々な形でのご支援をお願いさせていただき次第です。何卒宜しくお願い申し上げます。

カンパ振込先
郵便振替口座名「ICBUW・国際キャンペーン」
口座番号 01310-0-83069]

[資料-1]

すでに「拡散」してしまっている [劣化] ウラン兵器

現在、ウラン兵器を保有する国は、少なくとも約 20 カ国にのぼると言われている—アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、ギリシャに加え、トルコ、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、アラブ首長国連合、クウェート、バーレーンなどの中東諸国、さらに、パキスタン、タイ、韓国、台湾などのアジア諸国。さらにオーストラリアは、最近、劣化ウラン弾装備可能なエイブラムス M1 戦車をアメリカから購入することを決定したと報じられている。放射能兵器＝劣化ウラン弾は、すでにかなり「拡散」してしまっており、例えば、パレスチナでも、2000 年末、インティファダが再び激しくなった頃、イスラエルによって使用されているとパレスチナ自治政府内務大臣が発言し、問題となったことがある。（「パレスチナのヒロシマ (Palestinian Hiroshima)」の見出しで、この発言を報じた「エルサレム・ポスト」(12 月 19 日付)の記事を参照。)

また、アメリカの劣化ウラン兵器製造工場や、イギリス・スコットランドやイタリア・サルディニアの射爆場周辺、また韓国の離島・梅香里 (メヒャンニ) 演習場でも、劣化ウラン弾による汚染被害が以前から取り沙汰されてきている。日本でも、1995 年末から翌年の初めに、米軍が射爆場のある沖縄の鳥島で 1520 発の劣化ウラン弾を演習に使用—アメリカ軍側発表によれば、「誤射」—していたことが、約 1 年後に発覚して問題となった。

さらに最近のニュースによれば、韓国は、1980 年代、劣化ウラン弾を IAEA に報告せずに製造していた。劣化ウラン兵器問題は、焦眉の地球的問題である所以である。

[資料—2]

イギリス国防省認める—「劣化ウランは健康障害を引き起こす危険性あり」

現在、イラク駐留中のイギリス軍兵士に対し、下記のような内容の「DU(劣化ウラン)情報カード」が発行されているというニュースが、2 月中旬、劣化ウラン弾関係のメールネットワークを通じて世界に流れた。

「(表の記載)

DU(劣化ウラン)情報カード F Med 1018 (発行: 03/03)

あなたは、劣化ウラン (DU) が使用された戦場に派遣されています。

DU は、低度ながら放射性の重金属であり、健康障害を引き起こす可能性があります。あなたは、任務中に DU を含んだチリにさらされたかもしれません。

(裏の記載) 追加情報

あなたは、ウラン検出のための尿検査を受ける資格があります。こうした検査に関してもっと知りたい場合は、基地に戻り次第すぐに所属する部隊の軍医官に相談してください。軍医官は、DU の健康への影響についての情報を提供できます。また、国防省のホームページからも情報を得ることができます。

www.mod.uk/issues/depleted uranium/index.htm

[資料—3] イラクで採取した尿サンプルの分析結果について

昨年 6 月、劣化ウラン弾被害調査のため、「NO DU ヒロシマ・プロジェクト」の森瀧春子さんがイラクから持ち帰った尿サンプルのうち、一人の急性白血病患者 (7 歳の女儿) の尿サンプルに劣化ウランが含まれていることが、ようやく今年 10 月、ほぼ確認された。(U235/U238 の比率分析担当: 山本政儀教授/金沢大学自然計測応用研究センター・低レベル放射能実験施設)

なお、被採取者の女儿 (すでに死亡) の住まいは、爆撃地点から 100 メートル以内の地点 (バグダッド郊外アルクーファ) に位置していた。

改めて、本格的な劣化ウラン被害調査を直ちに実施することを関連国際機関、世界の良心ある人々に訴えたい。

[より詳しい関連情報に関しては、「NO DU ヒロシマ・プロジェクト」ホームページ <http://www.nodu-hiroshima.org/> をご参照ください。]

[資料—4] 支援のお願い: 「ウラン兵器禁止を求める国際共同行動デー2005」

2005年10月4日

兵士として、親として劣化ウラン被害を訴える！ -イラク戦争帰還兵ジェラルド・マッシュー夫妻緊急招聘-

ICBUW-Japan

「ウラン兵器禁止を求める国際共同行動デー2005」

嘉指信雄、ICBUW アジア太平洋地域コーディネータ
振津かつみ、ICBUW 評議員

皆さま

昨年より、ICBUW（ウラン兵器禁止を求める国際連合）では、11月6日を「ウラン兵器禁止を求める国際行動デー」として設定し、世界各地での取り組みを呼びかけています。（これは、国連総会により、毎年11月6日が「戦争と武力紛争における環境破壊を防止する国際デー」とされていることを踏まえて設定されたものです。）

昨年は第一回目でしたが、日本各地でも実に様々な取り組みが行われました。今年も、各地ですでに様々な計画が立てられているようですが、私たちは、劣化ウラン被害に苦しむイラク戦争帰還兵を、11月上旬、アメリカから日本に招聘するため、準備に取り組んでおります。

緊急招聘の目的

今回、来日を承諾してくれたジェラルド・マッシューさんは、イラク戦争終結後、派遣されたイラクで体調不良となり帰国。その後生まれた娘のビクトリアちゃんの右手が不完全だったため、マッシューさんが尿検査を受けたところ、劣化ウランが検出されました。[より詳しくは、この「支援呼びかけ文」最後の補足説明・参考資料を参照ください]

ご存知のように、劣化ウラン問題に関しては、アメリカ政府も日本政府も、その危険性を否定し続けてきています。しかしながら、アメリカでは、昨年4月、イラク帰還兵数名から劣化ウランが検出され、「ニューヨーク・デイリー・ニュース」誌がスクープ記事を掲載しています。（詳しくは、「アメリカの戦争と日本の有事法制に反対する署名事務局」ホームページ（<http://www.jca.apc.org/stopUSwar/>）を参照下さい。）

現在、彼らは、アメリカ国防総省に対し補償を求める裁判を準備中とのことです。また、この7月には、イラク帰還兵に劣化ウラン検査を受ける権利を認める法案がルイジアナ州やコネチカット州で成立しています。（「NO DU ヒロシマ・プロジェクト」ホームページ <http://www.nodu-hiroshima.org/>参照）

アメリカで起きつつあるこうした動きは、イラクに自衛隊を派遣している日本にとっても無視できない、決定的意味をもつはずです。ご存知のとおり、自衛隊が駐屯しているサマワでもウラン兵器が使用されたことが明らかになっています。しかし、マスメディアでは、今のところ本格的に取り上げられる気配が全くありませんし、政府は、12月中旬期限切れとなる自衛隊のイラク派遣延長に向けた態勢をすでに取りつつあります。

こうした状況を変えるためにも、アメリカでのこうした動きに直接関わっている当事者に日本に来て、劣化ウラン被害について訴えてもらうことは、非常に意義あることと思

ます。

賛同・支援のお願い

今回、ジェラルド・マシューさんは、仕事を休んで、また体調の悪さから同伴者の必要もあり、妻のジャニスさんとともに来日することを快諾してくださいました。言うまでもなく、日本に来てまで劣化ウラン被害を訴えることは、マシュー夫妻にとっては、きわめて甚大なリスクをはらむことです。

マシュー夫妻の勇気に応えるためにも、できるだけ多くの方に彼らの話を直接聞いてもらい、マスコミにも広く取り上げてもらいたいと思います。

現在のところ、11月2日(水)から9日(水)までの約一週間の滞在中に、広島、大阪、東京で集会・記者会見など開催できたらと思っております。(現在の暫定案では、2日(水)に関空着、翌3日(木)広島、5日(土)大阪、6日(日)以降、東京、9日に成田発です。できるだけ多くの都市を回ってほしいとは思いますが、マシューさんのお仕事の都合に加え芳しくない体調もあり、1週間の滞在、3ヵ所ぐらいでの集会開催が精一杯かと思われるので、ご理解ください。)

こうした講演ツアーの実施には、国際・国内交通費に加えて、宿泊費、会場費など、かなりの費用が必要となります。広く賛同カンパ・協力をお願いする次第です。すでにICBUWに賛同して下さっているかどうかは問わず、また、個人としてでも、団体としても構いませんので、ご支援をお願いいたします！

今回、集会が予定されている広島、大阪、東京以外の地域の方々からもご支援いただけましたら幸いです。

恐縮ではございますが、賛同金(個人：一口1000円/団体：一口3000円、多数口の賛同カンパ大歓迎)をお願いし、できるだけ多くの人々・グループの力を合わせた取り組みとして、ぜひ成功させたいと願っております。

振り込み先 郵便振込口座名：「ICBUW・国際キャンペーン」
口座番号：01310-0-83069

[なお、備考欄に、「2005年共同行動カンパ」と明記ください。また、賛同リストへのお名前の掲載を望まれない方は、「名前掲載希望せず」とお書きください。]

突然の提案で申し訳ありませんが、ご賛同いただけましたら、できるだけ早くその旨、下記のいずれかにお知らせいただけませんかでしょうか。

嘉指信雄/メール：horizons@cc22.ne.jp

振津かつみ/メール：f-katsumi@titan.ocn.ne.jp

森滝春子：haruko-m@f3.dion.ne.jp

マシュー御夫妻を緊急招聘する意義をご理解いただき、ご賛同・ご支援の程、何卒宜しくお願いいたします！

なお、ICBUWでは、「国際平和ビューロー(IPB)」などと協力し、11月9日にジュネーブで、ウラン兵器禁止に向け、ウラン兵器の健康・環境影響、国際違法性と禁止条約、被害者補償などについてのワークショップを開催し、国連やWHO、UNEPをはじめとする国際機関への働きかけを行います。またあわせて「ウラン兵器禁止国際署名」の国連軍縮委員会事務局への提出を行うべく準備を進めております。(これら国際的な取組みについては、追って、別途、ご報告させていただきます。)

[補足説明――

すでにメーリングリストでお知らせしておりますが、この五月、ニューヨークでは、NPT再検討会議に関連して劣化ウラン問題関連のワークショップ・集会が幾つか開かれました。そうした場でマシューさんは、「劣化ウラン問題については全く知らされていなかった。病気に苦しむ帰還兵に対する政府の態度も全く誠実でない。裏切られた気持ちだ」と、怒りを込めて語っていました。(マシューさんは、他の帰還兵とともに、娘のビクトリアちゃんに対する補償も含めて、アメリカ国防省に対し補償を求める訴えを出しています。)

また、二度ほど直接お会いする機会があった妻のジャニスさんも、「私たちの訴えを嘘だと言ってほしくありません。私たちの闘いは、娘のビクトリアが大きくなって、『ママ、もういいのよ』と言ってくれるまで続けるつもりです」と話されていました。今回、マシュー夫妻は、ビクトリアちゃんはベビーシッターを頼んでニューヨークに置いてこられますが、写真やビデオなどを持参して訴えたい、と伝えてきています。

確かに、湾岸戦争とイラク戦争で大量に投下された劣化ウラン兵器の最大の被害者は、イラクの人々、イラクの子どもたちですが、マシュー夫妻も、劣化ウラン被害者であることに変わりはなく、その訴えは、とても力強く、心打たれるものです。ぜひ、日本人たちにも直接聞いていただきたく思います。

参考資料——

「ニューヨーク・デイリー・ニュース」誌(2004年9月29日付)が、「戦争の最も小さな犠牲者」と題された記事を掲載していますが、下記は、その日本語訳の抜粋です。(「暗いニュースリンク」より転載。また、全文は、「ピースニュース」ホームページ(<http://www.jca.apc.org/~p-news/IRQ/041009iraqdu.htm>)に掲載されています。なお、「奇形」の表現が使われておりますが、これは医学用語として理解し、訳文そのままとしておきますので、ご了承ください。)

「03年9月初旬、陸軍州兵のジェラルド・ダレン・マシューは、突然の体調不良によりイラクから帰還を許されました。

マシューの顔面の半分は毎朝腫れるようになり、偏頭痛に襲われ、目は霞み、意識がはっきりせず、排尿の度に焼けるような痛みを感じるようになったのです。帰還してまもなく、マシューの妻ジャニス妊娠し、今年6月29日、女の子を出産しました。女の子ビクトリアちゃんは指が三本欠けており、右手はほとんど失われていたのです。マシューと彼の妻は、娘の衝撃的な奇形と父親の症状、そして従軍経験の間に何か関係があるのではと考えました。夫妻の家系には先天的欠損症の記録はなかったからです。夫妻はイラクで生まれた奇形児の写真を見て、状況が不気味なほど似通っているということに気づいたので、6月に、マシューはデイリー・ニュース紙に連絡をよこし、研究所での独自の尿検査の手配を依頼しました。独自検査の結果、マシューの尿から劣化ウランの放射線が確認されました。放射線に被曝することと、被曝した両親から生まれた子供の奇形には、多くの研究により関連性が認められています。

ニューヨークのハーレムから出征したマシューは、イラクでは第719輸送部隊のトラック運転手でした。彼の部隊はクウェートの陸軍基地からバクダッドの最前線まで補給品を運んでいました。マシューの話によれば、被弾した戦車や破壊された車両の部品をトラックの荷台に乗せてクウェートまで運ぶこともあったということです。」

Let's Ban Uranium Weapons! Save Children! Save the Earth!
(ウラン兵器禁止を! 子どもたちを、地球を救おう!)